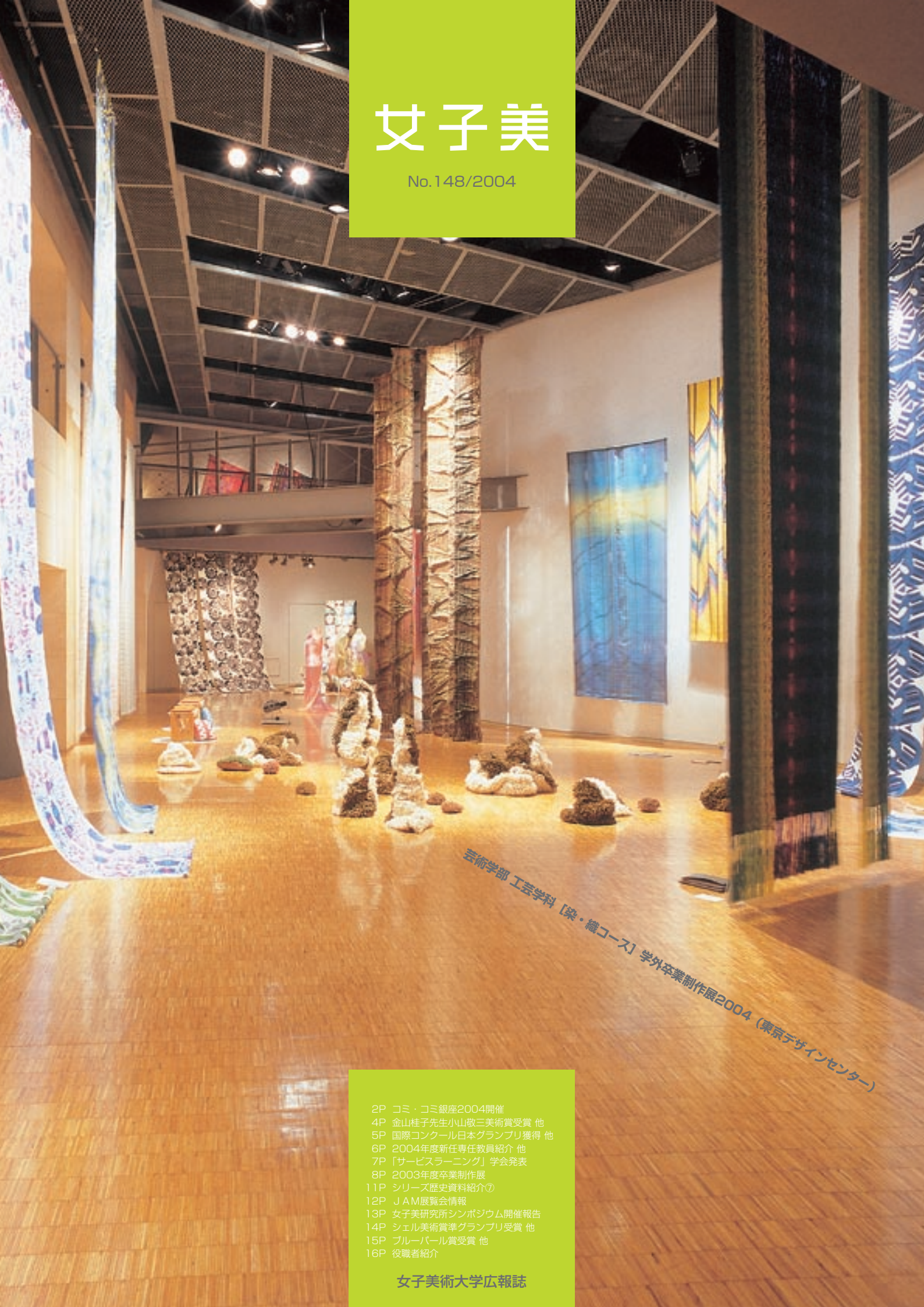
女子美

No.148/2004



芸術学部 工芸学科［染・織コース］学外卒業制作展2004（東京デザインセンター）

2P コミ・コミ銀座2004開催
4P 金山桂子先生小山敬三美術賞受賞 他
5P 国際コンクール日本グランプリ獲得 他
6P 2004年度新任専任教員紹介 他
7P「サービスラーニング」学会発表
8P 2003年度卒業制作展
11P シリーズ歴史資料紹介⑦
12P ＪＡＭ展覧会情報
13P 女子美研究所シンポジウム開催報告
14P シェル美術賞準グランプリ受賞 他
15P ブルーパール賞受賞 他
16P 役職者紹介

女子美術大学広報誌

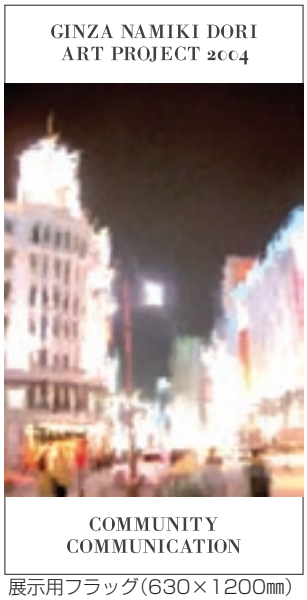
Topics ・1

『コミュニティー・コミュニケーション 銀座2004』開催

5月1日(Sat)〜5月16日(Sun)　開催場所:銀座西並木通り及び周辺地域

人と街がアート(衣服)でつながる

フラッグ・パフォーマンス展示イメージ(合成写真)



展示用フラッグ(630×1200㎜)

はじめに…

コミュニティーは、そこを訪れる様々な人々とのコミュニケーションを通じて成り立つものです。けれども、いつしか私たちは「コミュニケーション」のもつ意味を単に情報伝達という言葉に置き換えてしまっているのではないでしょうか。コミュニケーションは、人と人とが意思、感情、思考等を伝達し合う、温かみや広がりのある豊かな行為のはずです。この、「顔の見える人間関係」を構築する本来のコミュニケーションが都市化、高度情報社会のなかで失われることで社会全体に様々な問題が起っています。

そこで私たちは、アートとはコミュニケーションそのものであり、アートを通して人と人の出会いの場を演出することで、新たなコミュニティーを生み出すことができるのではないかと考えました。そして、もともと豊かな文化資源に恵まれたコミュニティーを形成し、今も芸術文化の集積地、発信の場であり続けている銀座を実践の場とするアートプロジェクト「コミュニティー・コミュニケーション銀座2004」(コミ・コミ銀座2004)を企画しました。

本企画の内容

このプロジェクトが目指すものは、衣服を通じたコミュニケーションです。なぜなら衣服は、古来民族や地域独自の形態、色彩をもち、コミュニティーを形成する世界共通の実用物であり、コミュニケーションを図るための象徴として、人々の暮らしとともにあるからです。

衣服造形家　眞田岳彦(芸術学部 ファッション造形学科助教授)[※1]が総合プロデュースするこのプロジェクトは、「服が旗になる」、「その服を着る」、「銀座を着る」、「銀座を切り取り、銀座をまとう」ことにより展開されます。

用意されたアイテム(プレファブコート:1枚1枚が衣服のユニットとなる定型の布)は、街灯を彩るフラッグになり、簡単に組み合わせて衣服になり、また、無限につなぎ合わせてあらゆる形態を作り出すことも可能です。

今回は、女子美生(大学・短大・付属中高)、アーティスト、OG、地域の人々(企業、商店、地元小学生等)や銀座を訪れるあらゆる人々の参画により、布をキャンバスに見立て、人々が「それぞれの思う銀座」を描いた絵画や写真をコンピュータとプリンタで印刷し、その布(プレファブコート)[※2]で衣服をつくり着用します。

私たちは、このプロジェクトを通じて、コミュニケーションのすばらしさを再発見し、銀座で新たなコミュニティーを創造します。

■「コミ・コミ銀座2004」学内活動報告

2003年10月、本企画への学生参加説明会を開催しました。眞田先生より、フラッグのサンプルを見ながらイベントの趣旨と活動内容について説明があり、出席した学生からはフラッグの制作やスタッフの仕事についての質問が相次ぎ、とても活気ある会となりました。

10月から1月にかけて、セイコーエプソン㈱の指導のもとデータスタッフの学生を対象としたワークショップを数回開催。フラッグ制作のためのデータ作成とプリントアウト作業をマスターしました。原画に近い色味でプリントアウトするための微調節が難しく、インストラクターの方からは“単純な流れ作業としてプリントアウトするのではなく、アーティストとして表現する機会でもある”と、プロ意識を持つことの重要性についても指導を受けました。

応募作品が出揃った2004年1月末からは本格的な作業に入り、日頃の作品制作へのこだわりを今回のデータ作りやプリントアウト作業にも垣間見せた学生も多く、意欲的に取り組んでいました。総数240点にもなるフラッグのプリントアウト作業は3月中旬に終了。現在、縫製作業に入っています。

このフラッグは銀座並木通りに掲げられるほか、コミコミステージのタープとして使用したり、パフォーマンスやワークショップの際に思い思いの造形にしたプレファブコートをまとい、銀座の街を彩ります。

(フラッグ完成までの手順)

「銀座を着る」をテーマに、各自が「銀座」を表現した作品をスキャニングし、フラッグ用データを作成。その後、協賛企業であるセイコーエプソン㈱の大型プリンタを使用し、東レ㈱に提供いただいた生地に出力。フラッグの形に縫製します。出力用フラッグデータの作成とプリントアウト作業を学生が担当しています。

※東レ㈱から提供いただいた生地はペットボトル再生糸を使ったインクジェットプリント専用生地で、今回のイベントのために開発されたものです。
※セイコーエプソン㈱の約110㎝幅の大型プリンタは、会期中、銀座の会場にも設置されワークショップ等で使用する予定です。

(学生支援センター　竹内悦子)

アートイベントガイド

■「オープン・アート・ギャラリー」〔期間〕5月1日㈯～16日㈰
銀座西並木通りの街灯を、女子美生、地域の人々、企業の方々、アーティストが「銀座」を描いた衣装作品（プレファブ・コート）約240枚で飾ります。
〔場所〕銀座西並木通り　5丁目より8丁目

■「コミュニケーション・トーク」〔日時〕5月15日㈯18：00～19：00（仮）予定
デザイン、メディア、美術など、多様な観点から、本プロジェクトのテーマである「コミュニケーション」を、それぞれの分野で活躍する個性的なメンバーが、アップル社のシアターで語りあいます。
〔場所〕アップルシアター　ギンザ　3F シアター　〔料金〕無料　〔定員〕84名（先着順）
〔出演者〕柏木博（デザイン評論家）、石渡建文（雑誌 BRUTUS 編集長）、眞田岳彦（衣服造形家）

■「チェック・プレイス」〔期間〕5月1日㈯～16日㈰
銀座西並木通りの街灯を飾る作品約240枚で、眞田岳彦が「チェックプレイス＝交叉する部屋」を創作。「人、伝統、時間、歴史、民族など、あらゆる物が交叉し世界を構成する」というコンセプトに基づいたインスタレーションです。また、制作過程の作業風景や参加者のコメントなど会場に放映されます。
〔場所〕バーバリー銀座ビル9F フォーラムスペース

■「イラストレーション・コミュニティー」〔期間〕5月4日㈫～16日㈰（仮予定）
20名のイラストレーターによるプレファブ作品を展示。また、クリエーター達のコメントが画像を通じて流されます。
〔場所〕プランタン銀座　5階　サロンドプランタン会場
〔企画協力〕：廣村正彰

■「パフォーマンス・ワークショップ」〔場所〕銀座西並木通り　㈱資生堂横　コミコミステージ
コミコミ・ステージでは、女子美術大学を中心とした学生・生徒が、アートコミュニケーションを行います。
◇「フェイス・ペインティング」〔開催〕5月2日㈰／4日㈫
女子美生が各自のイメージに基づいてプレファブ・コートを纏い、メイクをして銀座の街に飛び出します。
〔協力〕資生堂 SABFA
◇「ポートレイト　ペイント」〔期間〕5月3日㈪／5日㈬
女子美生が銀座の来訪者を描きます。初対面の「描く人」と「描かれる人」の間にコミュニケーションが生まれます。　また、本人と似顔絵を撮影、プリントアウトして展示します。
◇「ライブ＆パフォーマンス」〔開催〕5月8日㈯／9日㈰
女子美のマンドリン・音楽クラブなどが演奏やパフォーマンスをコミコミステージ及び周辺地域で行います。

銀座西並木通り会（コミュニティー・コミュニケーション 銀座 2004 主催）
銀座は、江戸時代に生まれ、明治以降新しい日本の顔として経済や文化を支えてきた。以後、常に最先端の文化の発信地として、人々を魅了しつづけている。伝統と革新、洗練と野暮、柔軟と頑固、優雅と競争。こうした土壌に恵まれて、歴史と伝統のある文化風土が銀座には存在している。数え切れないほど文学・音楽・映像の題材にも取り上げられ、芸術全般にわたってその影響は顕著である。さらに言えば、近現代の日本美術は銀座の多くの画廊から生まれたといっても過言ではないほど、銀座は美術の中心地としての役割を支えている。また、近年では海外の有名ブランドなどをいち早く日本に取り入れたのも銀座の並木通りの各企業であり、今回も進取の精神から銀座西並木通り会はこのプロジェクトを通じ文化と産業、そして社会へ新しい美術の発信を行いたいと考えている。　（㈱渡邊木版美術画舗　代表取締役　渡邊 章一郎）

※1）眞田岳彦　Sanada Takehiko
（衣服造形家 ／ Sanada Studio 主宰／女子美術大学 芸術学部ファッション造形学科助教授）
1962年東京都生まれ。ISSEY MIYAKE INC. 勤務後、イギリス滞在、美術、造形技術を学び、英国人彫刻家リチャード ディーコンの助手を経て、2002年 Sanada Studio inc. 設立。2001年より、女子美術大学芸術学部ファッション造形学科助教授就任。東京を拠点に多数の展覧会を開催。「生命・身体とは何か」という問いかけを衣服や繊維立体物を媒体として作品制作活動を、美術館、ギャラリーなどで行っている。また地方繊維文化と風土、生物などの関係から生まれる作品制作「Field Project フィールド プロジェクト」を日本各地で行なう傍ら、教育機関や美術館と共に演習、ワークショップなど、次世代を担う学生、子供の育成を行なっている。

※2）プレファブコート（PREFAB Coat）
2000年カナダ、日本を巡廻した展覧会のテーマとしてデザイン評論家 柏木博氏が提示した「環境問題に対する処方箋」をコンセプトに、環環問題に対する解決方法を意味するもとして眞田岳彦が、思索を具現化した衣服作品です。コミュニティー・コミュニケーションでは、このプレファブコートの思索を基本として延長線上に描き、作品思索を導き出します。異なる領域や地域、年齢や仕事からなる参加者が、同じ形の衣服に、それぞれの異なる考えや、異なる視点を持った絵柄を、プリンターで印刷します。そして、こうして出来上がった衣服が、フラッグとなり、街頭に吊り下げられて展示をされます。また、同時に別会場では、それらフラッグ（プレファブコート）を全て一つに繋ぎ合せて、各人の境界をなくし、互いに共有し得る大きな一つの覆いを形成します。それは、異なる考えや、視点、年齢の隔たりを越えた場を作り出すこととなり、経済構造とは離れた衣服デザインからの提言ともなります。参加者・鑑賞者が、作品制作やその場に身を置くことで、その場でしか共有できない、一つの意識や感動を得ることになります。

「コミュニティー・コミュニケーション銀座2004」
主催：学校法人女子美術大学、銀座西並木通り会
後援：中央区、読売新聞社
協賛：資生堂㈱、セイコーエプソン㈱、東レ ACS ㈱、アップルコンピュータ㈱、清水建設㈱
㈱コロモ・ドット・コム、繊維新聞社、繊研新聞社　他
協力：中央区立泰明小学校、㈲スタジオ A 建築設計事務所、㈱クリエイト・シミズ、ミカミ㈱、資生堂 SABFA、廣村正彰、志岐奈津子
デザイン協力：資生堂クリエイティブ本部

コミ・コミ銀座2004関連サイト／コロモ・ドット・コム　　http://www.coromo.com
★「コミ・コミ銀座2004」のこれまでの活動報告等が掲載されています。

COMMUNITY
COMMUNICATION
GINZA NAMIKI DORI
ART PROJECT 2004

NEWS・1 金山桂子名誉教授第17回小山敬三美術賞受賞

本学名誉教授の金山桂子先生が、第17回小山敬三美術賞を受賞されました。同賞は、これまでに優れた作品を発表してきた具象画家の業績を顕彰するものです。授賞式は東京・六本木の国際文化会館で3月15日に行われ、今年7月21日から7月27日までは日本橋高島屋で「小山敬三美術賞受賞記念展」が開催されます。

「記憶の中で」100P

<略歴>
1933年　広島県生まれ
1952年　日展初入選
1970年　光風会会友賞、光風会会員推挙
1971年　光風会展寺内萬治郎賞（74年も受賞）
1973年　日展特選
1974年　安井賞展（～82年まで9回出品）、坂崎乙郎企画による個展（紀伊國屋）、文化庁現代美術選抜展（80年も出品）
1976年　資生堂ギャラリーにて個展（78、85、92年も開催）、光風会展中沢弘光賞受賞
1979年　日展特選
1980年　第1回現代女流美術展（～1999年最終展まで毎年出品）
1981年　第 1回現代女流画家展（～ 1983年まで出品）光風会評議員推挙、日展委嘱
1986年　女流画家展（～1998年最終展まで出品）
1988年　日展会員推挙
1991年　光風会つばき賞
1993年　日展会員賞、「IMA絵画の今日展」（95、97年も出品）
1998年　金山桂子自選展　東京国際美術館
2001年　日展評議員推挙、NHK「土曜美の朝」作品紹介、出演
2002年　光風会理事推挙
2003年　金山桂子展　東京日本橋高島屋

北海道立近代美術館、広島県立美術館、尾道市立美術館、蘭島閣美術館などに作品収蔵。
1970年に女子美術短期大学の専任講師に就任、1976年に助教授となり、1986年から 1999年まで教授をつとめる。現在、女子美術大学名誉教授。

NEWS・2 えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト

本プロジェクトは、産学公連携事業として本学の学生有志が、多摩美術大学・東京造形大学の学生と連携し、江戸川区在住の伝統工芸者とのコラボレーションにより製品開発や市場開拓をおこなうことで、江戸川の誇る伝統工芸を地場産業として更に発展・振興させることを目指したものです。

伝統工芸を取り巻く環境は、「わざの持ち主」である伝統工芸者の高齢化、後継者減により、技が機械やコンピュータに代替され、「わざから生まれる美」そのものの存在が問われています。そのような背景の中で、今回のプロジェクトは、高度に練り上げられた伝統工芸者の腕と技に美大生のフレッシュな創造性と企画力をプラスすることで、新たな商品の差別化と高付加価値製品を生み出し、地場産業としての再生を図ろうとする大変意義深い企画でした。

昨年7月から1月にかけて、3大学の学生約150名が、学年、学科、大学間の枠を越えて江戸川の工匠に学ぶことから始め、去る1月23日から25日には江戸川区主催の展示会『「江戸川伝統工芸＋（プラス）」－美大生からの提案－』が開催され、新しい伝統工芸のかたちとして半年間の成果が発表されました。

NEWS・3 学生が制作した「ベンチ」がキャンパスに

相模原キャンパス2号館前に、昨年暮れから設置されている「ベンチ」は、現デザイン学科 PD コース4年の阿部香織・伊東加奈子・内山めぐみ・大段聡美さんの4名が、昨年度の3年次課題内コンペによって選抜され、夏休み中から約1ヶ月間かけ、実制作したものです。

作品名は「R5」で、赤い（Red）5個の輪（Ring）は、“Rest”“Relax”“Recreate”“Refresh”“Renewal”の意味があります。

昨年度の、東京デザイナーズウィーク学生作品展「すわるかたち展」にも出品し、『DESIGN　PREMIO 賞』を受賞しました。

材質は“FRP”で、屋外での耐久性は充分ありますが、出来る限り優しく座って親しんで下さいね。

（芸術学部デザイン学科教授　田村俊明）

NEWS・4 「ファッションクリエーター新人賞国際コンクール」日本グランプリを獲得

フランス・オートクチュール・プレタポルテ連合協会、エールフランス航空主催の第21回ファッションクリエーター新人賞国際コンクールにおいて、芸術学部ファッション造形学科3年の太田早紀さんが日本グランプリを獲得しました。今年度のテーマは「伝統と現代」。デザイン画応募総数3,117点の中から30人が選出され、パリ大会への出場権をかけた国内最終審査でさらに10人にまで絞り込まれました。9月半ばにデザイン画入賞の知らせを受け取ってから本人はもちろん、友人、研究室が一体となって作品制作に取り組み、11月26日の審査に臨みました。見事パリ行きの航空券を手にしたとの知らせには全員歓喜の声を上げました。以下は予選、本選に同行、サポートした牧野さんによる現場報告です。

太田　早紀さん

牧野　知佳さん

迎えた12月18日の国際コンクールは、パリのルーブル美術館の地下ホールで行われ、10カ国、約100着の作品が最終審査に参加した。各国から1名のグランプリ、その中から1名の世界グランプリが選ばれる。張り詰めた空気が漂う中を、様々な言葉が飛び交う。その中を流れるようにショーは進み、審査発表が始まった。「Saki Ohta」何を言っているのか全く分からない。しかし、今、はっきりと「Saki Ohta」と聞こえた。最初は一体何の賞を受賞したのかさえ分からなかった。日本グランプリに大喝采が起きた。この大会では、参加者のほとんどが生まれ育った国の文化や伝統を取り上げていた。しかし、あまり伝統に偏りすぎると他国から見たときに、民族衣装のように見えてしまう。太田さんの作品は、フランス18世紀のロココ時代の服装と現代のビジネススーツを掛け合わせて制作されていた。日本の伝統ではなく、ヨーロッパの伝統的な服装と現代のビジネススーツとの間に、生活しづらい服装という繋がりを導きだし現在の社会現象を風刺した。その発想と表現、バランスの良さが高い評価を受けた。

（報告：ファッション造形学科3年　牧野 知佳）

NEWS・5 相模大野ミロードのショーウィンドーをクリエイト

㈱小田急エージェンシーから、相模大野駅ミロードの駅コンコースに面した3つの大ウィンドーを芸術学部ファッション造形学科の学生にディスプレイしてほしいという依頼がありました。トータルプレゼンテーション（3年次）の授業内容と実施時期がこの企画と合致したので、授業の一環として3グループが参加し、与えられたテーマ「セール」にアイディアを凝らしてチャレンジしました。学生にとって、実際のショーウィンドーの中で自分たちのデザインを具現化する作業は始めてのことで、最初は戸惑っていましたが、早乙女喜栄子講師の熱心なアドバイスもあり、深夜近くに完成を見たときは感慨もひとしおでした。中でも中央のウィンドーは毎日ダンボールの箱が減っていく仕組みで注目を集め、プレゼンテーション効果を上げました。

3つのディスプレイのテーマと担当学生

「go to the sale market」
・大橋 佳純　・小宮山 裕香　・久保田 磨美

「count down mylord sale」　阿部 響子
・池田 咲恵　・久米 夕子　・溝口 詩織

「見つける楽しさ」
・小林 美華　・筒井 亜湖　・平田 さゆり

2004年度新任専任教員紹介

林　規章
Hayashi Noriaki
芸術学部 デザイン学科 専任講師

1964年　岐阜県生まれ　名古屋芸術大学美術学部デザイン科卒
ジャパングラフィックスを経て1991年　HAYASHI DESIGN. 主宰
同年より2004.2まで花王・作成部と契約。
化粧品のアートディレクション、デザインを手掛ける。
朝日広告賞入賞、日本広告主協会通産大臣賞、広告電通賞、
日本雑誌広告賞金賞、講談社広告賞、フジサンケイグループ広告賞、
デザインフォーラム99・佳作
01.02. ニューヨークアートディレクターズクラブ特別功労賞
98.02. チェコ・ブルノ国際グラフィックビエンナーレ入選
97.00.03. 世界ポスタートリエンナーレ富山入選
03. 社団法人日本グラフィックデザイナー協会　新人賞
社団法人日本グラフィックデザイナー協会会員
東京タイポディレクターズクラブ会員

コミュニケーションをデザインというカタチに昇華する事は、きっと容易な事ではないはずです。一般的に、デザインは、表層的な部分で、語られがちですが、一つの機能です。人は、必要に応じてか否か、何かを造りたいと願い、何かを伝えたいと願い、何か造り伝えることに意味を持とうと願ったりします。そんなものをすべてひっくめることが出来るのが、デザインであると仮説をたててみます。そして、いろいろな知識や見識をもち、オリジナリティの追求をする。それが、きっとコミニュケーションというカタチ（デザイン）になり、社会とつながる機能になる。それはデザイナーにとって幸せなことだと思う。ましてや誰か他者が共感を得てくれるのならより幸せだ。そんな、幸せを共有しながら、前進していきたい。

平成16年度 役職等人事・主任等人事

平成16年度　役職等人事

学長	立石 雅夫
美術研究科長	田村 文雄
芸術学部長	加藤　修
短期大学部長	佐藤 善一
図書館長	原　聖
美術館長	ヤマザキ ミノリ
研究所長	（兼）加藤　修
オープンカレッジセンター長	（兼）佐藤 善一
保健センター長	石田 良恵
大学教務部長	横山 勝樹
短期大学部教務部長	伊勢 克也
大学学生部長	見城 美子
短期大学部学生部長	柏原 花子
広報担当部長	（兼）伊勢 克也
国際交流担当部長	小林 篤志
学長補佐	山本 健史

平成16年度　主任等人事

○芸術学部・短期大学部共通

基礎教養系科目主任	稲木 吉一
外国語系科目主任	稲見 博明
保健体育系科目主任	小島 康昭
教職課程主任	前田 基成

○芸術学部

絵画学科洋画専攻主任	鴫　剛
日本画専攻主任	橋本　信
工芸学科主任	清水 明子
立体アート学科主任	津田 裕子
デザイン学科主任	山本 吉男
デザイン学科	
VCD コース主任	茅野 義博
PD・ED コース主任	（兼）山本 吉男
メディアアート学科主任	浅野 正博
ファッション造形学科主任	小倉 文子
芸術学科主任	面出 和子

○短期大学部

造形学科美術コース主任	柳 千代子
造形学科デザインコース主任	木下 道子
専攻科主任	嶋澤 道雄
別科主任	佐々木 宏子

○学生相談室

学生相談室長（相模原）	江川 澄子
学生相談室長（杉並）	山田 朋子

NEWS・6 平成15年度 女子美 美術奨励賞（留学生対象）

創立100周年記念事業の一環として、平成11年に設立された「100周年記念大村文子基金」は、大村智名誉理事長夫妻からの寄付を基に、文子夫人のお名前を冠して設立されました。この基金の褒賞事業のひとつである女子美美術奨励賞の留学生対象部門の受賞者として、今年度下記の3名が選考されました。いずれの方々も研究または就学における態度が非常に熱心で、かつ制作活動においても常に真摯に取り組む姿勢が今回の受賞へとつながりました。

＜大　学　院＞
美術研究科博士後期課程美術専攻
造形表現領域1年次
孫（そん）　榮琁（よんそん）さん（韓国出身）

＜芸 術 学 部＞
立体アート学科1年次
范（はん）　淳美（すうみ）さん　（台湾出身）

＜短期大学部＞
造形学科デザインコース1年次
林（りん）　季瑩（きいん）さん（台湾出身）

Topics ・2 学生が学会で「サービスラーニング」について発表

大学で学んだ学問を地域社会の問題解決に役立て、自らの学びを検証し、その結果を公表することで社会に還元させる―。この、アカデミックな学習と地域社会での体験型学習を融合させた社会貢献型の学びの方法は「サービスラーニング」と呼ばれ、アメリカの大学では一般的におこなわれている教授法です。本学ではこれを教職課程の総合演習Ａ「現代社会とボランティア」のゼミに導入しています。

昨年12月、第6回全国ボランティア学習研究フォーラム東京・武蔵野大会が開催され、テーマ「交響する学びの世界へ―ボランティア学習が拓く『学力』―」のもと、10分科会に分かれて研究発表がおこなわれました。「サービスラーニング」をテーマにした第10分科会では、デザイン学科3年の野村高胡さんと立体アート学科3年の上岡ひとみさんが、総合演習の授業の中で経験したサービスラーニングについて事例発表をおこない、参加していた大学関係者や教員、他大学の学生などからその学びの手法と女子美での実例の意義について、高い評価を受けました。

女子美生のサービスラーニング

総合演習の授業の中で設定されていた基本テーマは「共生のためのアート」。学生たちは、サービスラーニングの第一段階としてまず、公的施設やNPO団体に赴き、フィールドワークに取り組み、現状の把握と課題の発見をおこないます。(※1) 次に、大学で学んでいる学問が課題解決にどう役に立つかを考察し、実践を通じて検証します。その後、このプロセスを振り返り、グループごとに成果や提案をまとめ、学生同士の発表と相互評価の場を設けます。これを広く公表することで社会へ還元するというのがサービスラーニングの一連の流れです。また、この総合演習の授業の中では、学生たちはサービスラーニングの最終段階として、自分たちの経験をベースに、将来教師になった場合を想定した、オリジナルの「総合的な学習の時間」の指導案作りへの挑戦が課題となっていました。(※2)

2003年度の履修生の中には、具体的には、保育園での園児とともに遊具作りをおこなったグループ、福祉施設で利用者に対する自立支援を目的とした、陶芸や織物、絵葉書作りなど工芸品の制作サポートをおこなったグループ、NPOの入会案内パンフレットを見やすく手に取りやすいものへと改良したグループなどがありました。アートやデザインを専攻する美大生ならではの発想力や創造力は、課題発見、提案、実践、振り返りというサービスラーニングの全プロセスの中で大いに活かされました。

社会へ二重、三重に還元

今回の学会での発表は、このゼミの担当教員であり、同時に日本ボランティア学習協会常任理事でもある永井順國教授のもとに、「ぜひ女子美の学生に発表を」とのリクエストがあったことから実現したもので、学生たちは、発表の中で自らが体験したサービスラーニングのプロセスを説明し、そこから引き出した考察や提案を、具体例をまじえて報告しました。

永井教授は、サービスラーニングによって、学びを二重にも三重にも社会へ還元することが可能だと話します。すなわち、学生がボランティアとして社会活動に携わることによる受け入れ先の団体や施設への直接的な還元、そしてそこから得た考察を今回の学会のような場で公表して学びを共有するという意味での社会全体への還元、さらには、それを共有した人たちが新たにサービスラーニングを実践したり、社会活動に参加することによる、人や地域への還元です。

アカデミックな学びと社会活動が直結

発表を聞いた他大学の学生の感想の中で多かったのは、「大学で学ぶ学問を地域社会での課題解決に実際に活かせることがとてもうらやましい」というものでした。他方、発表した二人の学生は、学会発表によって自分たちのやってきたことの意義を外からの目で確認できた、大学で学んできたことの社会での位置付けを確認できたと話しています。

学生たちが美大生として日々培っている、絵を描きものを作るスキル、斬新なアイデアを生み形にする力を存分に活かして活躍できる場所は、社会の中のそこここに存在します。サービスラーニングを通して学生は新たに自らの活躍の場を開拓していく―。学んだことの社会への還元という枠には収まらない、学生たちの今後の可能性が期待されます。

（※１）本学教職課程研究室は、地域の人々とＮＰＯ・ボランティア団体とのコーディネート機能を果たしている世田谷ボランティア協会との間で協定を締結している。これに基づき、学生の受け入れ先の選定や協力要請、事前・事後学習の実施に全面的に協力いただくことで、地域ＮＰＯでのフィールドワークの実施が可能となっている。
（※２）「総合的な時間の学習」は新学習指導要領のもと、子どもたちの課題探求・解決能力などの生きる力を育むための時間として、小学校３年生以上のすべての学校段階に設けられている。

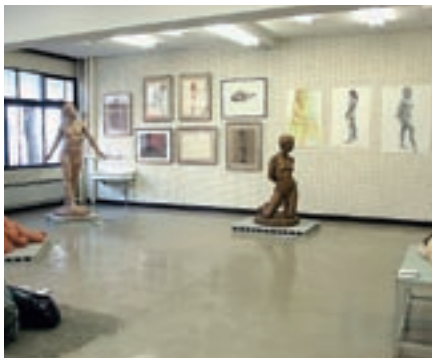
心身障害により就業能力が限られている人たちに対して、仕事の実習を通して自立支援をおこなう「世田谷区立梅丘福祉実習ホーム」でフィールドワークをおこなった学生の報告書。施設の概要、抱えている問題点、自分たちで編み出した解決策、考察などがまとめてある。ここでは学生は再生和紙による絵葉書作りに関する提案、機織りによるコースターなどの製作の補助、利用者と地域住民の交流の場としての作品展の開催の提案などがおこなわれた。

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

2003年度 卒業(修了)制作展

〈杉並キャンパス〉
短期大学部



●平成15年度　卒業制作賞・修了制作賞・優秀作品賞　受賞者（短期大学部）

〔卒業制作賞〕

造形学科 美術コース
- （絵画） 中村　晴香
- 村尾　桂
- （彫塑） 栗原　優子

造形学科 デザインコース
- ・情報メディア系 臼井　法子
- 清水　愛子
- 守屋　麻美
- ・空間インターフェイス系 猫塚　弥央
- ・工芸デザイン系 （木工） 安田　美智子
- （染織） 和泉　綾子
- （刺繍） 田中　秋香子

〔修了制作賞〕

別科 現代造形専修　長野　美保

〔優秀作品賞〕

造形学科 美術コース
- （絵画） 伊藤　沙江夏
- 陶山　晴美

造形学科 デザインコース
- ・情報メディア系 内田　明子
- 富沢　むつき
- 前澤　知里
- ・空間インターフェイス系 大原　史子
- 丹治　莉恵
- ・工芸デザイン系 （陶芸） 川﨑　民子
- （金工） 峰崎　裕美
- （染織） 酒井　快恵
- （刺繍） 上野　明日香

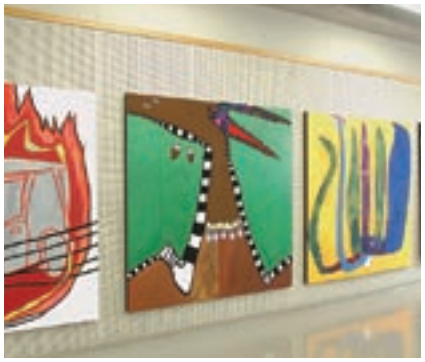
専攻科 造形専攻
- ・絵画コース 中台　ゆう子
- ・彫塑コース 安藤　香央里
- ・情報メディアコース 葛西　絵里香
- 吉田　沙織
- ・テキスタイルコース 堀　さやか

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

〈相模原キャンパス〉

芸術学部・大学院



※大学院

●平成15年度　卒業制作賞・卒業論文賞・優秀作品賞・優秀論文賞　受賞者（芸術学部）

〔卒業制作賞〕

絵　画　科 洋画専攻
喜田　小百合
久郷　　梓
堀込　幸枝

絵　画　科 日本画専攻
永田　　薫

デザイン科 造形計画専攻
内田　正子
山上　悠子

デザイン科 環境計画専攻
朽方　さゆり
吉村　　彩

工　芸　科
井上　弘子

〔卒業論文賞〕

芸 術 学 科
亀高　まゆ美

〔優秀作品賞〕

絵　画　科 洋画専攻
小野　沙織
關　ひとみ
洞野　志保
船越　郁美

絵　画　科 日本画専攻
今川　愛子
藤野　麻里羅

デザイン科 造形計画専攻
北原　妙子
坂下　千文
寺林　真代

デザイン科 環境計画専攻
金子　智美
福永　ゆず
本山　祥子

工　芸　科
谷澤　春子
橋本　麻希

〔優秀論文賞〕

芸 術 学 科
小沢　和佳子
野村　真希

Graduation

JOSHIBI UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

学外卒業制作展

■大学院美術研究科
＜美術専攻日本画領域＞
3月22日㈪～3月28日㈰
会場：文京シビックホール
■芸術学部
□『東京五美術大学連合卒業制作展』
絵画科＜洋画専攻・日本画専攻＞①②
2月21日㈯～2月26日㈭
会場：東京都美術館（上野公園内）
□絵画科＜日本画専攻＞③
3月2日㈫～3月7日㈰
会場：江戸川区総合区民ホール１Ｆ展示ホール
□工芸科
＜陶･ガラスコース＞④
2月19日㈭～2月23日㈪
会場：スパイラルガーデン
＜染・織コース＞⑤＋表紙
2月20日㈮～2月22日㈰
会場：東京デザインセンター

□デザイン科環境計画専攻
3月20日㈯～3月21日㈰
会場：ラフォーレミュージアム原宿
□デザイン科造形計画専攻
＜グラフィックコース＞
3月19日㈮～3月21日㈰
会場：東京デザインセンターガレリアホール
＜プロダクトコース＞
『ファイナルプレゼンテーション』
3月26日㈮～3月28日㈰
会場：東京デザインセンターガレリアホール
＜インテリアコース＞
3月26日㈮～3月30日㈫
会場：新宿パークタワーギャラリー・3

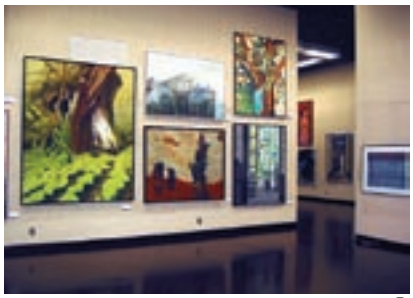
■短期大学部
□造形学科デザインコース
＜情報メディア系＞『はなばな』
3月23日㈫～3月28日㈰
会場：Gallery Conceal
＜クラフトデザイン系（テキスタイルデザイン）＞⑥
2月16日㈪～2月22日㈰
会場：銀座アートホール
＜クラフトデザイン系（陶芸メタルデザイン）＞⑦
『陶芸・金工・漆芸展』
2月22日㈰～2月28日㈯
会場：美術会館・ギャラリー青羅

⑦

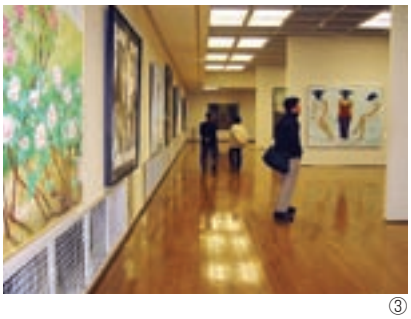
⑥

④

①


②

⑤


③

平成15年度　加藤成之記念賞
大学院 美術研究科 修士課程 デザイン専攻 色彩計画領域
森下　愛
〈芸術学部〉
絵画科 洋画専攻　今川　直子
絵画科 日本画専攻　豊島　麗子
デザイン科 造形計画専攻　君塚　真利子
デザイン科 環境計画専攻　市毛　洋子
工芸科　鳥居　葉子
芸術学科　秋保　里衣

〈短期大学部〉
造形学科　海老根　香
専攻科　小林　さやか
別科　八木万里子

平成15年度　福沢一郎賞
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
橋本　さゆり
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 版画領域
高木　香苗子

平成15年度　大久保婦久子賞
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 洋画領域
辻　由佳里
大学院 美術研究科 修士課程 美術専攻 染織領域
石原　智子

平成15年度　女子美美術館収蔵作品賞
卒業（修了）制作で優秀な作品を女子美アートミュージアムが所蔵作品とします。

＜芸術学部＞
絵画科 洋画専攻　今川　直子
絵画科 日本画専攻　三須　広絵
デザイン科 造形計画専攻　鹿島　絵美
デザイン科 環境計画専攻　佐々　知栄子
工芸科　斉藤　奈々子

＜大学院＞
美術研究科 修士課程 デザイン専攻 視覚造形領域
野々垣　絵里

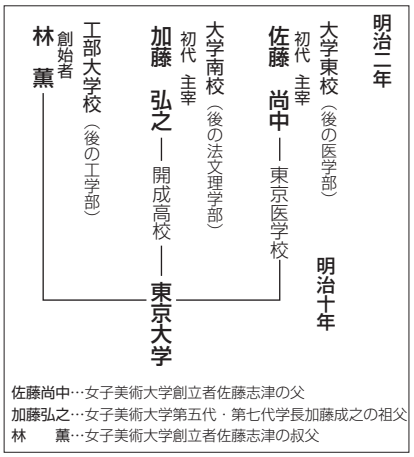
Series ー シリーズ歴史資料紹介⑦ー

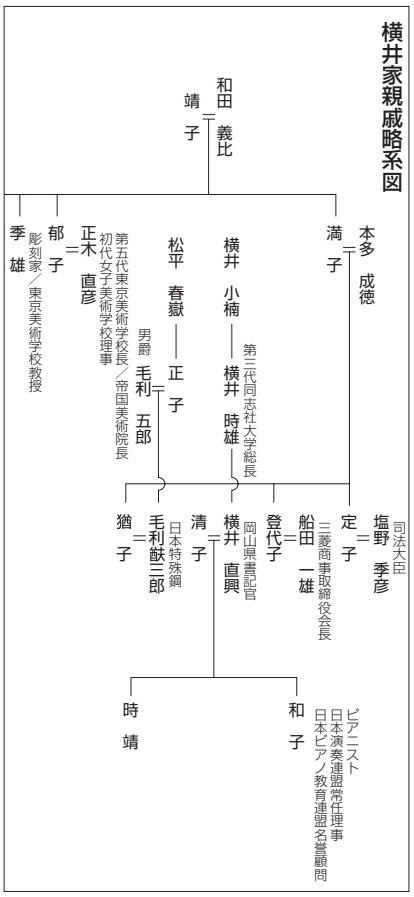
本郷菊坂に女子美ありき

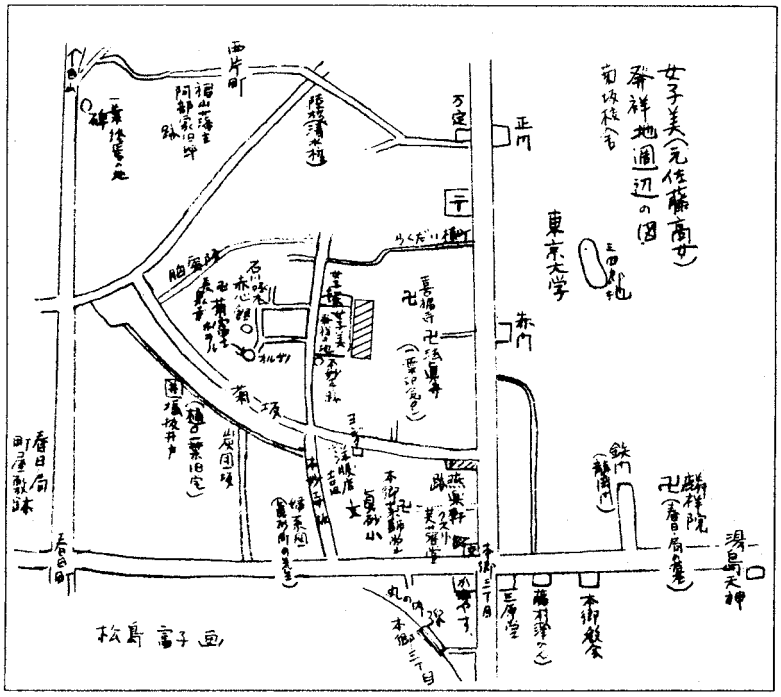
平成6年、女子美術大学付属高等学校・中学校同窓会幹事会の折、卒業生井上ミチ（昭和11年卒）より「菊坂の女子美校舎跡地に文京区の文化財表示板がないのは大変残念。是非学校から教育委員会に働きかけてほしい」と提案された。井上家は姉妹四人が女子美、しかも最初の弓町校舎と本郷教会が並ぶその背中合せの位置に自宅があった。本郷教会の初代牧師は海老名弾正（第八代同志社大学総長、夫人は横井小楠の娘みや）、二代目牧師は横井小楠、長男時雄（同志社大学第三代総長、ピアニスト横井和子の祖父・女子美大創立者の一人横井玉子の親族）で三才の頃より日曜学校に通った井上の女子美への偲いは濃い。ある日区役所に出向き、なぜ女子美の表示版がないのかと尋ねた所「学校からは何の申し入れもない。あんな所に女子美があったんですか」と若い職員は寝耳に水の有様で、話にならなかったと言う。思えば東京大空襲（昭和20年／1945）で菊坂校舎が焼失し杉並に移転してより50余年、この間、佐藤高女同窓会としても何の働きかけもしてこなかったのである。そこで百周年記念の目標として署名を集め、教育委員会に提出したが「私立学校に対してまでは対応できない。文京区には東京大学がある」と相手にもされなかった。本来なら、官立ではできない教育をしたいために苦労して私立を創設したのだから、百年を迎えるのがどんなに大変なことか理解を示してもよいはずだが、生憎それができないようであった。同じ区に兄妹校である順天堂大学もあるのだが、それも驚かれた。

この間、私は佐藤家の調査を進めた所、まったく思いもかけず日本初の官立東京大学は女子美創立者佐藤一族によって始められたことを発見したのである。その栄光と誇りのあかしとして、東京大学と並び建つ世界に二つしかない女子のための美術学校を、象徴である赤門と向き合うように建設したと、同窓会会報11号に発表した。これ以後対応が変り、平成12年3月（2000年）異例として女子美跡地の文化財表示板が建ち、今後の維持管理はすべて区で責任を持ってくださることになった。思い出してみれば「石川啄木の通った床屋の表示板はあるのに、文化勲章、功労者のいる女子美の跡地になぜ何もないのか」と職員を困らせた時もあった。最近ここに名門女子美の跡地として売り出したマンションが建ったようだ。また、宇野浩二、谷崎潤一郎、竹久夢二、田宮虎彦等が宿として利用し、大正、昭和モダニズムの豊饒な文学作品を生み出した菊冨士ホテルが真正面にあり、現在文学散歩コースになっている。是非立ち寄ってほしい。

（女子美術大学歴史資料整備委員　青木純子）







女子美発祥地周辺の図　菊坂校舎

JAM・女子美アートミュージアム展覧会情報

展覧会開催報告

＜ JAM ＞「アジアの華Ⅱ－美の環流」

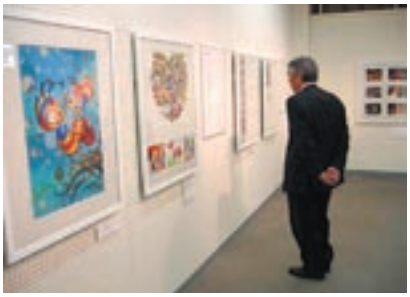
平成15年5月ガレリアニケにて同窓会の主催で「アジアの華一時代を駆けた女子美の留学生たち」展が開催されました。今回は、このニケでの展覧会を受け継ぎ拡大する形で開催しました。これまで海外といえば、ヨーロッパとアメリカに向けられがちであった視線を一旦アジアに向けてみると、女子美の美術教育の成果がいくつも大きく花開いていることがわかります。

今回の展覧会は、2部構成となっており、第1部はニケでは展示出来なかった何香凝（中国）、羅薫錫、朴崍賢（韓国）、陳進（台湾）など留学生10人の作品を中心に紹介し、第2部では、アジアの現代を代表する女性作家7人の作品を紹介しました。また、ここ数年の内に女子美を卒業した留学生の作品をロビーに展示し、新旧留学生の学ぶ姿を浮き彫りにすることができました。伝統の重さと端正な美を感じさせる第1部と、第2部の若くほとばしるエネルギーの表現が興味深い対照をなしています。作品の多くを海外から借用して展示できたことは、準備期間の短さを考えるとJAMにとって画期的なことでした。中国の作家、尹秀珍の作品「国際航班（飛行機）」を展示会場で作家と共に学生たちが組み立てたことも大学の美術館にとって良い経験となりました。　（2004年1月17日－2月22日）

＜ガレリア ニケ＞「かさなる手わざ アニメーションの世界展」

近年日本のアニメーションは技術も内容も世界をリードする日本文化の一つとして世界で注目を集めています。一方、アニメーションの制作現場にもデジタル化が進んでいます。丁寧に描かれた背景画の上に何枚ものセル画を重ねていく従来の手仕事の技法は失われつつあります。アニメーション作品を支えたこういった手わざの集積を忘れないためにこの展覧会を開催しました。この展覧会の趣旨に賛同された日本動画協会をはじめ10社のアニメーション制作会社の協力を得られたことが大きな力となりました。また、地場産業としてアニメーション産業に力を入れている杉並区と共催することで、地域との交流を生かした展示となり、昔のアニメ作品を懐かしむ大人から現在TV等でアニメーションを楽しんでいる子供たちまで多くの来館者に楽しんでいただくことができました。

（2004年1月13日－2月1日）



展覧会案内

＜ JAM ＞「仲條正義」展　風狂風景

現代日本グラフィックデザイン界の第一人者、仲條正義氏のグラフィックワークをJAMにて展覧します。仲條氏は資生堂「花椿」やサントリー角瓶の広告等で広く知られています。近年「フジのヤマイ」という一連のポスター作品で第5回亀倉雄策賞を受賞されました。今回は、この「フジのヤマイ」の作品を中心に仲條グラフィックワールドを紹介します。仲條氏は平成16年4月より女子美術大学芸術学部デザイン学科の客員教授として学生の指導にあたられます。斬新でユーモアも秘めた氏のデザイン作品のJAMからの発信は学生のみならず地域社会へも大きく貢献するものとなるでしょう。

会期：平成16年4月7日㈬～5月5日㈬
会場：女子美アートミュージアム
主催：女子美術大学美術館
共催：女子美術大学デザイン学科

仲條正義氏のデザイン作品の一部

Topics ③「戦前の女子美とアジアの学生たちの足跡」開催報告
女子美術大学研究所第1回シンポジウム

新春の2004年1月17日㈯、標記シンポジウムが相模原キャンパスで開催され、約100名の参加者がありました。シンポジウムは遠隔会議システムを利用して、杉並キャンパスにも配信されました。プログラムは以下の通りです。

シンポジウム「戦前の女子美とアジアの学生たちの足跡」

開会挨拶　加藤　修 (女子美術大学研究所　所長)
司　　会　島村　輝 (女子美術大学 教授)
発 表 1　金　喆孝 (韓国　三星美術館資料室　首席研究員)
「羅　薫錫 (1896-1948) の活動と社会状況」
発 表 2　黄　光男 (台湾　国立歴史博物館　館長)
「陳　進画藝」
発 表 3　小勝禮子 (日本　栃木県立美術館　特別研究員)
「戦前・戦後の女性画家の活動と社会・家庭環境をめぐって」
討　　論　発表者と司会による討論
司会による討論のまとめ
閉会挨拶　立石雅夫 (女子美術大学・女子美術大学短期大学部　学長)

金　喆孝 氏

黄　光男 氏

小勝 禮子 氏

このシンポジウムには二つの背景があります。一つは、2003年4月１日に女子美術大学研究所が誕生したことで、その事業の一環としての歴史的な第1回シンポジウムであるということです。二つ目は、女子美アートミュージアムが、企画展「アジアの華Ⅱ－美の還流」を開催したことです。その第一部では、アジアの諸国・諸地域から戦前の女子美に学びに来た学生のうち、後にそれぞれの国や地域で創作活動を展開した作家がとりあげられました。この企画展に連動して、シンポジウムは計画されました。

シンポジウムの趣旨は、アジアの各国・各地域から戦前の女子美に何を求めて学びに来たのか、出身地に帰った後、美術活動を通してそれぞれの社会とどう対峙したのかを明らかにすることにありました。このシンポジウムの内容は、2004年秋に刊行予定の（仮称）「研究所報告」Ⅰに掲載する予定です。

女性・美術・アジアの近代　―シンポジウム コーディネーターを務めて

今回のシンポジウムは、戦前女子美に学んだアジアの学生たちの足跡をたどり、その美術活動の歩みと女性の社会的地位向上に果たした役割を検証しようとするものでした。三名の方の発表とその後の討論を通じて、いくつかの大切な問題が浮かび上がってきたと思います。

まず一つは女性が芸術家として認められていくにあたっての、社会的ジェンダーバイアスの問題です。女性作家が社会的に認められることの困難さについて、個々の作家の力量という問題を超えて考えられるべき課題として提出されたと思います。第二には日本、あるいは東京での勉強ということが、戦前の芸術家志望者にとってどういう意味を持っていたかという問題です。女子美が西洋文化への通路となったとともに、雑多な東洋的要素が付け加わったことの功罪が話題となりました。第三には戦前の日本がとった植民地統治や侵略主義の歴史と関連して、日本を含むアジア地域の近代化と戦争の問題に、教育機関として女子美がどう関わったのかという問題があります。国家の進める戦争政策に対し、相対的な軸をたてられたのかどうか、百年余の歴史を持つ学園として検証すべき大事な課題が提出されました。

拙い司会にもかかわらず、多くの皆さんのご協力をいただき、現在の、そして未来のアジアの美術活動に関わる女性に勇気と励ましのエールを送るための足場を固める第一歩として、貴重な催しを開くことができ、心から感謝する次第です。

（芸術学部基礎教養系教授　島村　輝）

NEWS・7 杉並区　上井草商店街空き店舗シャッターにガンダムを描く

昨年11月末に、杉並区役所杉並区区民生活部と上井草商店街振興組合より、メディアアート学科研究室に上井草商店街の空き店舗シャッターに機動戦士ガンダムのアニメ画を描いてほしいとの依頼があり、12月13日㈯と14日㈰の両日、メディアアート学科の学生6名とデザイン学科の学生2名、計8名が参加して商店街にあるアニメプロダクション、サンライズ社のすぐ前の空き店舗のシャッターいっぱいにガンダムを描きました。杉並区にはアニメーションのプロダクションが数多くあることから、区としても、アニメーション文化を積極的にアピールしていく計画を進めていますが、今回の制作もその一環として行われました。当日上井草アニメフェスティバルが開催され、多くの方に制作風景を見ていただくことが出来ました。

（芸術学部メディアアート学科教授　山野雅之）

NEWS・8 「シェル美術賞2003>2004」　準グランプリを受賞

大学院美術研究科修士課程美術専攻洋画領域2年生の辻由佳里さんが「シェル美術賞2003>2004」で準グランプリに選出されました。受賞作品は「虚脱」です。シェル美術賞2003>2004は、昭和シェル石油株式会社主催の新しい現代アート表現を担う優秀な若手作家を発掘することを目的とした公募展です。1956年にスタートしたシェル美術賞、また平成に新しく開催された昭和シェル現代美術賞の実績を踏まえています。

今回は1,655点、1002名の応募があり（平均年齢は28.4歳）、そのなかより2点の準グランプリ、4点の審査員賞、40名の入選作品が選定されました。

略歴

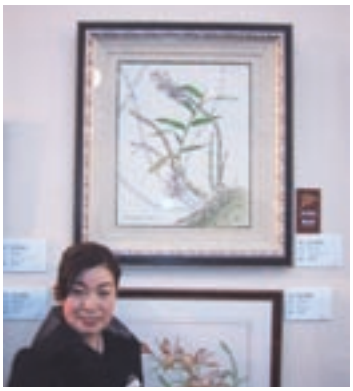
1976年生まれ　神奈川県相模原市在住
1999年　グループ展「011」
（青華画廊 /Key Gallary）
2000年　グループ展「011」
（青華画廊 /Key Gallary）
2002年　グループ展「011」(ギャラリー青華)
神奈川県美術展　入選
2003年　女子美術大学大学院洋画1年生展
（ギャラリー青華）
トーキョーワンダーウォール公募
2003　入選
2004年　女子美術大学大学院洋画2年生展
「、。展」（読句展）

「虚脱」 2003年　145.5X145.5cm　油彩･キャンバス

NEWS・9 ～卒業生紹介～　ボタニカル・アート作家　滝澤栄利子さん

2月21日から29日まで東京ドームで開催されていた「世界らん展日本大賞2004」で本学芸術学部 洋画科の卒業生滝澤栄利子さんが、美術工芸部門・ボタニカル・アート部門で優良賞・トロフィー賞を受賞されました。作品はデンドロニュウム・スミリエという蘭で、優しく揺れ動くバルブを背景に、ピンクのかわいらしい花が描きだされています。また、4月8日から10月11日まで開催される「浜名湖花博」では7月30日～8月5日にこの程の受賞作品を含め過去の受賞作品12作品の展示が予定されています。滝澤栄利子さんは植物画（ボタニカルアート）の分野で活躍されており、今年は本学のアート・セミナーで「Water Color ボタニカルアート」という講座に外部講師として来校いただく予定です。興味のある方は、ぜひご参加ください。

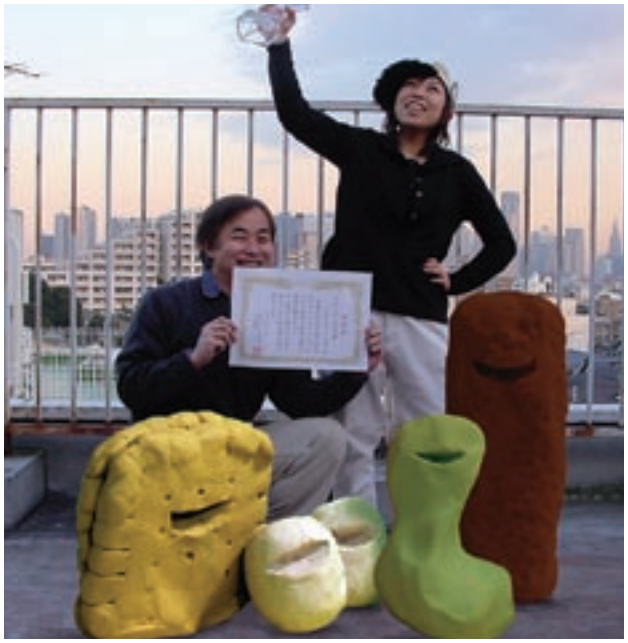
＜滝澤栄利子さんホームページ＞
http://www5e.biglobe.ne.jp/~b-garden



NEWS・10 『学生デジタルコンテスト』ブルーパール賞受賞

東北デジタル放送株式会社後援による、第10回［学生デジタルコンテスト］の受賞作品が発表され、短期大学部デザインコース2年次の土田朝子さんがブルーパール賞（最優秀賞）に輝き、賞状・盾・奨励金をいただきました。『Gum』と名付けられた作品は、お菓子の国の愉快な物語です。

皆で一緒にボール遊びをしようとしているのですが、、。受け取ると、どうしてもボールを相手に渡す事のできない<ガム>とその友だちのキャンディーやビスケットの友情物語です。でもボールがビンの底に落ちてしまい皆で困っていると、ガムが変身してその形を変えビンの底からカメレオンのように取り出してくれるというかわいらしい内容です。丁寧な動きと表情豊かな作品で、一つ一つのカットを繋げていくクレイアニメーションです。



NEWS・11 『ケイタイあかり展2』

12月4日㈭～12月26日㈮の23日間、リビングデザインセンター OZONE において「ケイタイあかり展2」が開催されました。プロデザイナーの20作品と都内近郊のデザイン系専攻の学生の約80作品の総勢約100点の持ち運べるあかりが展示され、そのうち女子美デザイン学科からは6作品を出品しました。この展示会ではLED（発光ダイオード）の使用が条件となっていましたが、LED は環境に配慮した、時代に適した第4世代の光源として近年注目されているものです。この LED の特色である低消費電力、低発熱、応答性の速さ、省スペースなどを活かしながら新しい提案をしました。

クロージングセレモニーでは、女子美生の作品の多くが、参加デザイナーから選ばれ、良い評を得る結果となりました。

■出品者 黒川智子「GABYOOO」
菅原安奈「ku:ra:ge glove」
鈴木美智子「ココロ灯(ビ)」
花島由美・石塚智枝「フロシキ」
日向若菜「キラメク女(ヒト)」
山田玲奈「ochoko」
（芸術学部 デザイン学科研究室）

NEWS・12 『サポートクッションα』グランプリ受賞

保健体育研究室の石田良恵教授とデザイン学科の田子裕子助手が㈱さがみはら産業創造センターとともに開発に携わり、商品化された「腰痛軽減簡易装着型自動車シート」（商品名はエルゴテックス サポートクッションα（アルファ）／B-14）が三栄書房発行のカーグッズマガジン誌「2003カーグッズ・オブ・ザ・イヤー」の企画でグランプリ（最優秀アイテム）と快適部門賞を受賞しました。このクッションは理想的な運転姿勢が保てるよう、背部、腰部、大腿部がサポートされるよう人間工学に基づいて設計され、腰への負担軽減に効果を発揮します。付属のリーフレットでは石田教授によって、筋力トレーニングや運転時の疲れをとるストレッチ体操が紹介されており、商品とともに2003年9月からビレダ販売より発売されています。

役職者紹介～新入生のみなさんへ～

新しい歴史を創る

理事長　中川　浩扶

本校は明治33年（1900年）に設立、104年になる。その中心的な役割は、横井玉子先生にあった。同じ時期に設立された女子英学塾（津田塾大学）、東京女医学校（東京女子医大）とも共通して、女性の職業教育を目標にしていた。横井先生の学校設立には、嫁いだ横井家の義父横井小楠（維新の思想家）からは有為な人材育成のこと、義母つせからは技芸、美術のことの影響があると思われる。

さて、横井小楠の師佐藤一斉（昌平坂学問所学長）は、その著の中で、教育の根本は（くだいて言うと）「教えてからやる気を起こせと言っても効果はない。やる気を起こさせてから、教えれば効果は大いに挙がる」と書いている。

教育を受ける新入生のみなさんの立場に置きかえてみると、やる気をどう持つかということがはじまりです。みなさんは、美術を目標にして入学してきた時点で、すでにやる気が起きているということです。あとは、できるだけ早く環境に慣れて女子美の新しい歴史を創ってください。教員も職員もみんなで応援します。

入学　ほんとうにおめでとう！

創造の源泉は好奇心

学　長　立石　雅夫

勉強は面白くなく遊びは楽しいと感じるのはなぜか。勉強は必要であるが強制される受け身の義務であり、遊びには積極的な発意による主体的な意思がある。小・中・高校時代まではそうであったかもしれません。しかし、学ぶことは何かを吸収することであり、それは自発的に楽しく行ってきたはずです。人類が数万年かけて獲得した言葉も、人は生まれて数年でおぼえています。「それはものを学ぶことが楽しくてたまらないからである」と、木原武一氏は『天才の勉強術』（新潮選書）という著書の中で記しています。これからみなさんは、楽しく遊んでください。自らの思いや希望を現実のものとするには、学びを遊び、心を解放し、集中し持続する精神が支えとなります。その原動力は好奇心です。思い出してください。幼少のころの何にでも驚き感動し吸収してしまう好奇心の旺盛さを。好奇心が飽くことのない探究心と、それを表現したい欲求を生み出します。

本学は、みなさんの思いが社会で生かされ現実化できるように、できる限りのサポートをします。受け身ではなく、積極的に何事にもチャレンジしてください。クラスメートや先輩たちとのふれあい、サークル活動や学外活動なども、高校時代とは異なり、同じ道を進む仲間とともに充実したものとなるでしょう。

いまから将来の自分の姿も具体的にイメージしていただきたい。女子美はそのために十分に練られた教育課程を用意しています。感受性を育み創造力を磨くことは勿論、ものの価値を見極め、企画力、応用力を身につけることが可能です。さらにこれからの時代には、複眼的、横断的、学際的能力が求められています。貪欲に好奇心を持って生き生きとキャンパス生活を楽しんでください。

ご入学おめでとうございます。

美術研究科長
田村　文雄

芸術学部長
加藤　　修

短期大学部長
佐藤　善一

訂正（お詫び）
前号 147号におきまして、記載に誤りがございました。ここに訂正いたしますとともに深くお詫び申し上げます。

P.2　OGインタビュー「ピカドン」の作品写真のキャプション
8ミリ・16ミリ（誤）　→　35ミリ（正）

P.16「つやまる」のパッケージイラスト作者
捺沙知代さん（誤）　→　捧沙知代さん（正）

イラスト　高野華生瑠（Takano Kaoru）
女子美術大学大学院 美術研究科
修士課程 美術専攻 版画領域2003年修了
書籍、雑誌、宣伝美術、映画パンフレット、CDジャケット等で活躍中

発　　行　学校法人　女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
企画・編集　企画部 広報課
監　　修　山田　愛子
発　行　日　平成16年4月1日
広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報課》TEL.03-5340-4513　FAX.03-5340-4523
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp　http://www.joshibi.ac.jp